

野球を科学する

岡村 甫 OKAMURA Hajime

工学博士
高知工科大学学長
東京大学名誉教授

聞き手 **加古 真一** KAKO Shinichi

技術士〔総合技術監理・建設〕
道路・トンネル系グループチームリーダー

加古：今日は、ご多忙中、このような機会を頂き本当にありがとうございます。先生は「有限要素法を用いた鉄筋コンクリートの解析手法の開発・確立」、「自己充填コンクリートの開発」等々の研究成果にあるように、コンクリート工学において世界的に著名で、数々の名誉ある賞も受賞されています。本来ならば、先生のご専門であるコンクリートについて伺いすべきところですが、今回は、知る人ぞ知る先生の野球に関する豊富なご経験と研鑽についてまずお伺いし、次いで、若者の育て方や技術の事々、土木業界の今後の話などにつなげていけると考えています。



●“伸びる球”はこうやって投げる

場合は上から投げられないことはなかったんですが、バッターに投げるときはサイドの方が楽だったですね。ほとんど迷いなくサイドスローにしていましたね。手の動きが自然だから。

加古：東大で17勝をあげる武器となる“落ちる球”を高校時代に覚えられたそうですが、どのような握り方、手首の使い方ですか。

岡村：私の一番の武器は“落ちる球”ではなくて“伸びる球”です。このように握って投げるんです（ストレートの握りより若干浅く、人差し指と中指を縫い目にかけて力を入

れてボールを握り、指先で逆回転を与えるように投げる）。指先でビュッとやって、球に回転を与えるんです（7ページの写真参照）。だから、一番疲れるのは実はここ（掌の親指と人差し指の間あたり）なんです。よくピッチャーは握力がなくなると言いますが、特にこの“伸びる球”を投げると握力がなくなるんですよ。2年生の春に肩の調子が悪かったので、やむを得ず、高校時代に投げていたこの握り（いわゆるシンカーではなく人差し指と中指の間にボールを浅く挟む握り）でスピリット系の“落ちる球”をストレートと混ぜて投げる投球術を身につけました。

加古：先生の武器は、てっきりアンダースロー投手特有のスピリット系かシンカー系の“落ちる球”だと思っていましたが、“伸びる球”だったんですね — 驚きました。今のプロ野球選手でも先生の“伸びる球”のような指の使い方をする投手はいないのでしょうか。

■ 私は“伸びる球”で勝負した

加古：岡村アンダースロー投手誕生のきっかけは、中学時代の紅白戦においてサイドスローでマウンドを踏んだことだったかと思いますが、最終的に「アンダースロー」というスタイルを選ばれたのはなぜですか？

岡村：もう記憶も定かでないですが、サイドスローをやっていて、ホップする球を投げたかったんです。地面を這って行ってホップする球。この球が一番打たれないと思い、手を下げていったんです。当初のサイドスローからだんだんと手が下がりアンダースローにたどり着きました。

加古：その当時は、先生のようにどちらかというと小柄な投手というのはオーバースローではなくてサイドスロー、アンダースローが主流だったのですか。

岡村：一般的にどうだったかはわかりませんが、私の

岡村：そうですね。いないと思いますよ。10年ほど前、甲子園で長年高校野球の審判をされていた慶応大学出身の本郷さんにお会いしたときに、彼から言われたのは、長年審判をしていたが、高校野球のピッチャーで私ぐらい遅い球で伸びてくる球を投げるピッチャーは見たことがないということでした。スピードは遅いけども、バッターは振り遅れるというのが一番の特徴でした。



●“打ちたいからボール球とわかっていて打っていた”
長嶋さんらしいお話ですね——

17勝した内の3分の1ぐらいが、“伸びる球”で勝っていますが、実はコントロールがあまり良くないことが多いのです。3分の1ぐらいは、“落ちる球”で勝つてますね。その場合は逆にコントロールは良かったと思います。残りの3分の1は“伸びる球”も“落ちる球”も特に良くないのに勝つたような気がします。

加古：大学野球の話詳しくお聞きしたいのですが、やはり私が非常に興味があるのが長嶋（茂雄）さん、杉浦（忠）さんです。岡村先生が大学1年生当時の、長嶋さん、杉浦さんを擁した立教大学が、東京六大学史上最強のチームだったのではないですか。個人的には当時の立教大学メンバーでプロ球団と戦っても互角に戦えた、少なくとも杉浦さんが先発した試合については勝つことも十分可能だったと思うのですがいかがでしょうか。

岡村：私もそう思います。あの時の杉浦は多分日本一のピッチャーですよ。長嶋は日本一のバッターです。それから、本屋敷（錦吾）は日本一のショートです。あの時のプロと比べてもあの3人は卓越していると思います。本屋敷（阪急→阪神）の守備と長嶋のバッティング、杉浦の球。それはプロですぐに証明されましたね。長嶋（巨人）はルーキーで打点王とホームラン王の2冠で文句なしの新人王、杉浦（南海）は入団した年に27勝で新人王。杉浦が投げるときの立教チームには他のチームがまったく歯がたたなかった。

長嶋には誰もストライクを投げなかったですよ。どのチームも。例えば東大の吉田投手はうまいんですよ。全部ストライクからボールになる球しか投げない。結果4打数ノーヒット。

加古：長嶋さんはボールとわかっていて打つたんですか。

岡村：そうです、打ちたいから。特に彼の4年生の春は、一番調子が良いし、体力もあった。フリーバッティングを見ると当時の広い神宮球場で10本中7本はホームランで、打ち損じがないんです。残りの3本も打球が上がりホームランにはなりません。ライナー性の鋭いあたりでした。2箇所（ゲージの内、レフトからは遠い1塁側のゲージ）でフリーバッティングをするんですが、いい当たりをするとレフトの上段にいつてワンバウンドで場外へ消えていった。彼のバッティングはプロに入団してからは進歩していませんからね。本人は進歩していると言うかもしれませんが、ピッチャーからみて彼の一番のピークは4年生の春です。だから、打ちたくてしょうがない。手の届く範囲は全部打ちに行くというバッターで、本当に凄まじかった。

加古：その後、長嶋さん、杉浦さんも卒業され、各校が互角の戦いをしていたと理解しています。例えば昭和33年秋季リーグ東大は最下位（6位）ですが5勝9敗で各校が混戦。ただし、他大学は甲子園出場経験選手を揃えており、東大は野球の技術だけを比較すると5勝9敗以上の実力差があったと思います。それをどのようなやり方で補って互角の戦いをしていたのでしょうか。

岡村：私は、中学で野球を始めてから大学2年生の秋まで、練習試合も含めて味方が2点以上リードして逆転されたことは一度もないんです。どんなチームに対しても「リードをすれば必ず勝つ」という遺伝子、心理が植えつけられていたことが一因です。相手がどんなに強くても何をしてくるにしても、リードしたら勝つよう

な気分ができていて、しかも相手は東大にリードされて負けたら大変だというので力が出なくなるんです。観客が一杯いて、相手チームは緊張して十分に力が出ない。私たちはフルに力を出しきって互角の成績になっていたと思います。もしオープン戦等のどうでもいような試合だったら、ほとんど勝てなかったかもしれません。

加古：先生の投球の話をもう一度お伺いしたいのですが、先生は大学当時、日をおかずの三連戦・三連投でしかも三完投を経験されています。これは、恐らくチーム事情もあってかと思いますが、現代野球では考えられないことです。当時の西鉄の稲尾さんにもあるように三連投ぐらいはあったかもしれませんが、三完投というのはやはり常軌を逸していると思うんですね。先生にとっては体力の限界を超えた状態での戦いだったと思うのですがいかがでしょうか。また、何故、こんなことができたと思われませんか？

岡村：競った試合で、緊張して投げていると体が動くんですよ。3連投の後は確かに体がガタガタになりましたね。今言われた限界を超えた状態で、マラソンを走り終えた翌日みたいな感じです。しかし、私は後半になって力が衰えるということはなかったです。

ひとつはやはり練習ですね。1年生の時の練習で、「いい球を200球投げる」ことを繰り返していました。ですから、初戦で120球ぐらい投げて、翌日も投げ続けているとだんだん調子がよくなるんですね。3戦目は疲れてきて、確実に球の切れが悪くなりストレートの球威も落ちてくるけれども、「落ちる球」を多投することでかえってコントロールがよくなります。もう1つは私が、アンダースロー投手だったことが一因かもしれません。早稲田大学の安藤元博（東映→巨人）もアンダースロー投手なんですが、早慶六連戦で5完投していますよ。アンダースローの場合、疲れるのは肘から先だけで、オーバースローほど肩を使わないので肩の消耗は少ないんです。一番消耗するのは握力なんです。握力は1日寝たらかなり回復します。ですからアンダースローやサイドスローのようにあまり肩を使わないで投げれば、ある程度連投も可能です。杉浦だって連投しても威力が落ちなかった。彼も肩を使わないでむしろ肘と手と下半身で投げているから。

加古：人間の体のつくりからすると、医学的には「上から投げる」より「下から投げる」方が自然だと聞いたことはあります。

岡村：しかし、下から投げる方が重力に逆らっている

から、下半身は大変なんですよ。オーバースローは肘と肩を一番消耗するんでしょうけど。

■ 他人と異なる“長所を伸ばす”

加古：岡村先生と同級生の東大野球部片桐主将に関する記事をいくつか読みました。私の中では片桐主将が、歴史ある東大野球部を代表するリーダー（主将）であると思えてなりません。片桐主将に関するエピソードなど、“リーダー片桐主将”について教えてください。



●“長所を伸ばすこと”が第一！

【略歴】

岡村 甫（おかむら はじめ）

高知工科大学学長、東京大学名誉教授、工学博士

1938年 高知県生まれ

1957年 土佐高校から東京大学へ進学

1961年 東京大学工学部土木工学科卒業、1966年 東京大学大学院工学系研究科博士課程土木工学専攻修了

1982年 東京大学工学部教授、96年 東京大学大学院工学系研究科長兼工学部長を併任（98年3月まで）

1999年 高知工科大学副学長、99-00年 土木学会会長、その他各種委員会委員長、会長等を歴任

2001年 高知工科大学学長

専門はコンクリート工学。世界的な権威でハイパフォーマンス・コンクリートを開発。

東京大学野球部のエースとして東京六大学リーグで活躍。東大では歴代1位となる通算17勝をマーク。卒業後は、連盟審判員、東大野球部助監督、監督も務めた。

岡村：片桐は間違いなく東大野球部を代表するリーダー（主将）です。片桐の親父さんも東大野球部の選手だったんですが、親父さんは、生まれたばかりの息子を東大グラウンドに連れてきて、「お前はここで野球をやるのだ！」と言ったそうです。親父さんは、満鉄勤務で満州に赴任していて、最後に引き揚げてくる時に親父さんだけが家族と一緒に帰国できなかったそうなんです。それで、お母さんが4人の妹たちと彼（片桐）の5人を連れて帰国した。その時に、お母さんは親父さんから「長男の彼は野球をやらなければいけないから、万一、何かがあったら長男だけでも助ける！」と言われたらしいです。そんな親父さんの元で、しかも4人の妹たちとそういう環境の中で育った。そして、武蔵高校を卒業して2浪しているんですが、受かるまで淡々と東大を受験し続けた。このように人生に負けないで立ち向かっていける人間というのは胆力

というか、度胸というか、それらが他の人と全然違うんですよ。

私は3年生の冬にスキーに行ったんですが、転んで怪我でもしたら大変ですよ。結果転ばないで帰ってきたんですが、片桐に会った瞬間、彼はすごく喜んだんです。ホッとしたらしいんですよ。彼は私がスキーに行くということを事前に聞いて凄く心配していたらしいのですが、スキーに行く前には、全然そういう素振りを見せなかったですね。

それから、4年生の春のリーグ戦1週間前に私が腰椎を痛めてまったく投げられない状態が続いたんです。

東大病院に行っても治してくれない。結局片桐が親父さんの知り合いの整体師のところ連れて行ってくれたんです。その治療のおかげで試合前日にやっと投げられるようになって、うまく勝ったんです。普段は何も言わないけども、常に全体を見て、こちらが危ない時にはちゃんと気を配り、適切な行動をするというリーダーでした。

また、彼が膝を怪我して膝に溜まった水を抜き、痛み止めの注射をして試合に出たことがあるんです。そんな状態だったんですが、プレーは普段と全く変わらなかった。痛い素振りなんか全く見せないで普通に

淡々とプレーしていました。

他に片桐の凄いところは、彼が大事なところで盗塁するとクロスプレーでも全部セーフになるんですよ。アウトのタイミングでもスライディングすると相手がボールを落とすんです。それに勝ち試合では絶対エラーをしなかった。負けている試合ではエラーするんです。そんなに上手いショートじゃないんですけど、勝っている時にはエラーしないから安心なんです。それから、肩は強くないんだけど全部アウトになる。間一髪セーフというのは無いし、悠々アウトも無い。みんなびったりアウトです。そういう非常に不思議で特徴のある選手でした。

普段は寡黙で黙々とやるタイプの主将なんで下級生は近寄り難いぐらい怖いそうなんです。そうすると、片桐は何気なく下級生と麻雀とかをして、それで下級生がみんなホッとして、彼を怖くなくなるんです。もちろん彼は全然怖くない、優しい男ですから。そういうリーダー、主将でしたね。

加古：岡村先生とバッテリーを組んだ高橋（秀明）選手もすばらしい捕手ですね。

岡村：彼がいなければ、17勝はあり得なかったです。東大史上最高の捕手です。彼は、母一人子一人で、大分工業高校を卒業して福岡の企業に就職したんですが、思うところがあって半年ぐらいで退職し、それで東京の予備校で2年間ほど勉強して「文I」に入ってきたんですよ。私はおかしいと思って「お前はなぜ文Iに入ってきたんだ」と聞いたんですよ。そしたら、「今年は理Iは難しい。合格しないから、試しに文Iを受けたんだ」と。それは変な論理ですよ。でも彼は、同じ無理でも少しでも可能性のある方、つまり理Iより文Iを受験して受かったから入ったそうなんです。そんな男ですが、彼は高校時代に稲尾投手と一緒に野球をやっていて、当時は弱肩だったそうなんです。それで、まず懸垂をして肩の筋力を鍛えて強肩になった。次に、捕ったら直ぐ投げる練習をしたんです。具体的にはミットを水につけて鉄板みたいに硬くして、ミットで捕るといよりも球を跳ね返すようにして素早く右手に持ち替えて投げる練習をしたんです。ある時、チームメイトが彼のミットを借りて、試しに捕球しようとしたんですが、誰一人として捕球できませんでした。誰もができない技術を工夫して身に付けていることに皆が驚いていました。そんなキャッチャーなので、盗塁されたことはほとんどありませんでした。

これは、卒業してから聞いたんですけど、試合後、1回から最終回まで全球のサイン・球種を覚えていると言うんです。それから、ピッチャーが球を離れた瞬



●野球が好きです！
轟員の選手は高橋慶彦(広島→ロッテ→阪神)です

間にはもうどこに来るかが分かっていて、球離れが悪いとか、回転が悪いとか言って捕球するんです。野球はピッチャーも大事だけれど、本当はキャッチャーが決め手なんです。プロでも古田（ヤクルト）、伊東（西武）がいて優勝しているでしょう。それから、山倉がいるときは結構巨人は優勝していたし、谷繁がいるから中日は強いんですね。

私が一試合で120球ぐらい投げるとすると、彼が出すサインは、その内100球は私が投げたい球種。そして10球は私が投げたい2つの内の1つ、残りの10球だけが違うんですが、それで首を振って次に出たサインが一致するというリードでした。

加古：先生は東大野球部の助監督、監督も経験されていて、そのときの指導方針は「長所を見つけてそれを伸ばす！」。

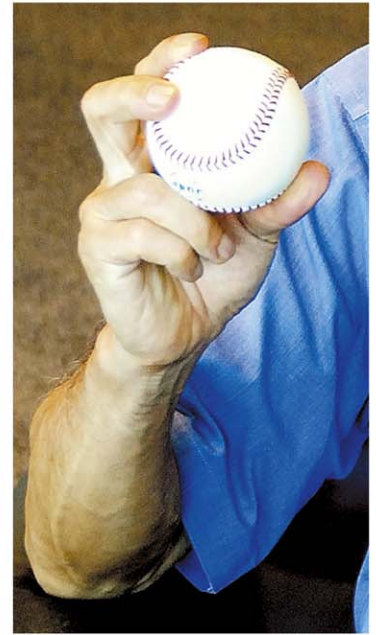
岡村：それは自分自身がそうだったからです。普通の人が見たら私は体格はよくない、球にスピードはないんだからピッチャーとしての力がないと思うでしょう。唯一高校の監督が私のピッチャーとしての才能を見つけてくれた。何を買ってくれたかは自分では分からないのですが、少なくとも私を甲子園に行けるピッチャーだと買ってくたんです。しかも私は、野球の選手としてはピッチャー以外は全く素質がないわけです。

もう1つは、野球というゲームの特性なんです。それは囲碁と将棋の違いで、野球は将棋でサッカーは囲碁に近いです。野球は、ポジションによって特性があって、その特性にあった選手を上手く配置したチームが強いわけです。落合監督率いる中日が強いのは、外野手全員が足が速くて肩も強いといった特性に応じた選手で構成しているからです。ファーストとサードは足が遅くても打撃がよければ良い。そういう特徴がポジションにあるわけです。だから短所があったら別のポジションに移ればよい。逆に長所がない選手はどこでも使えないわけです。

ピッチャーの私の場合、伸びるシュートボールが得



●“量で満足”してはいけない



“伸びる球”の握りは、ストレートより若干浅い。人差し指と中指に力を入れて、ボールを握りつぶす感覚で、球に逆回転を与える。

意で、この球だけは打たれない。そうするとこのボールを生かすために他の球を投げれば良いですね。だから、1個だけでも良い球があれば投球を組み立てることができるんです。

加古：先生の「他人と異なる長所を見つけて伸ばす」というのは、高知工科大学の学長になられた今も変えておられません、野球の技術を伸ばす、人を育てるというのは同じということですか。

岡村：同じです。というのは、野球選手がそれぞれ何か特徴を持っているのと同じで、人間というのはみんな特徴を持っているのです。自分では自分の才能が分からないんですが、私の野球の才能を見つけてくれた人があるように、見つけてくれる人があるかどうか重要です。たとえば、「あの先生に会ったから今の自分がある」なんていう人は沢山いるでしょう。やっぱり人間は環境によって影響を受けるわけですね。また、人は「人が育つことを助けることはできても、育てることはできない」です。“育てる”というのはおこがましいわけですね。育つためには環境の責任と、本人の責任が半々なんです。育つかどうかというのは本人が育ちたくなるような分野だったら育つわけですね。それをここはダメ、あそこはダメなんて言ったら育つわけがない。

会社でも上司が若い人の良さを見つけてやって、それを刺激するということが重要です。つまり、その人が伸びる環境を整え、チャンスを与えるということ。

その一例として、私は以前から若い学生を外国に連れて行って発表させてきました。今は世界のトップレベルで活躍している東大の前川先生は、彼が修士の2年生のときに国際会議に連れて行ったんです。これは、大学の研究成果というのは人による投資、人にお金をかけるのが一番効率的だという考えからです。

加古：現在高知工科大学では必須科目を設けず、学生に自由・自律性を与えていて、これは学生を信頼し、学生に責任を持たせるということだと思のですが、この成果はあがってきていますか。

岡村：学生の成長というのは本当に素晴らしいものです。私の六大学での野球の経験からも言えますが、1年生のときにたいした選手ではなくても、4年生でベストナインになっている選手がいます。若者の大学4年間というのは長いんです。中学・高校から一生懸命やってきた人間に対して、極端に言うとうちから始めた人間が、大学を卒業するときには負けにだけ力をつけることが可能なんです。それぐらい、その間の練習環境が良ければ大きく成長するんです。日本の大学のシステムは一般的に良くないからたいして伸びない。日米で比較すると高校までは日本の方が学力が高く、大学を卒業するころには同レベルになって、大学院に行ったら逆転する。高知工科大学の学生は皆真面目に授業に出て、授業中の私語なんかは全くないで

す。また、プレゼンなどもどんどんさせています。

高知工科大学では、世界一「人が育つ」大学を目指しています。私たちができることは、人を育てることではなくて人が育つ環境を造ることです。そのための教育システムとして教員評価システムを取り入れ、学生の授業評価結果が学内全員に公表されています。これは、教員と学生とが、緊張感を持って、共に育つシステムです。

中には、初めは「授業がわからないのは学生が悪いからだ」というような考えの教員もいましたが、「わからせないのは、自分が悪い」と気づき、改め、教員も一緒に成長してきました。教員が変わると学生もちゃんと変わるものです。要は、人が育つ大学というのは、学生だけでなく教員、職員も含めて全職員が育つということなんです。高知工科大学の学生は、人が育つことを何よりの喜びとする教員と職員に囲まれていて、本当に幸せだと思いますよ。

■“量”に満足していないか？

加古：先生は研究・開発において良い成果をあげるには、「努力の量×質」の特に「質」が重要だと述べられており、野球の練習でも同様のことが言えると思います。ただ、この「質」を高めるのが非常に難しいと思うのですが、どのようにすれば、あるいは心掛ければこの「質」を高めることが可能になるのでしょうか。



●青ガラスの学長室は独特の光の洪水の中

岡村：皆、“量”で自己満足しているんですよ。要するに自己満足するのではなくて、結果が悪かったらどこが悪かったかを反省して、やり方を考えろということなんです。例えば、試合に負けなければ、全力を尽くしてやったから負けても満足だという人がいますが、それでは進歩が無い。私は試合で負けて満足したことはないです。試合で負けたら必ず反省点、改善点があるんです。改善する方法として、配球のように翌日すぐに対応できるのもあれば、1年間かけて対応するものもある。また、ピッチャーは、勝負する回数が打者の9倍あるので、9倍のスピードで上達するんです。やはり、チャンス、経験を積んで上手くフィードバックしないと進歩しません。

それと、努力の“質”についての大部分の責任は、全体をマネジメントするマネージャーにあるんです。野球の練習の質を良くするのは監督の責任であり、授業の質を良くするのは大半が教員の責任です。

私が、東大野球部の2度目の監督時代に、「質を上げない限り努力したとは認めない」と選手に言ったんです。そうするとある選手は、「うちの監督はひどい人ですよ。努力しても結果が出なかったら認めてくれないんです。今まで努力は尊いものだったけれども、努力をしても駄目だと言われたのは初めてです」と人に言ったと私に話してくれました。これは監督としての私を自慢しているんですね。

要は、“質”を高める努力をしてくれということですよ。私自身は努力するのが嫌いですし、皆さんも同じでしょう。努力をしなくて上手くいけば一番良いわけです。“質”を上げるためにどのように努力をするかを考えて、“量”を少なくすれば良い。

野球でも間違った練習をしてどんどん下手になっていく選手がいます。例えば、速球を打とうとして早い球を打つ練習ばかりしていたら、当てるだけのバッティングになってしまったり、かえって下手になる練習をしている場合がある。本当に上手くなる練習を考えないとイケません。

それと2度目の監督のときは、チームとしての全体練習は2時間程度とし、後は各自の自主的な練習に委ねることにしました。これも、各人がそれぞれの力を伸ばすことを主眼において、考えて練習してほしいということです。

■ チームを強くするために“チームワーク”は必要ない！

加古：先生は、野球というチームを強くする為には「チームワークは必要ない！」と述べられています。先ほどのお話にあったように、要は個々の技術的なレベルアップが重要であるということだと理解してよい

のでしょうか。また、日本の会社や組織では、まだ「チームワークが重要だ！」と言っています。先生の考えをお聞かせください。

岡村：“チームワーク”を問題視することによって、技術が伸びないことを誤魔化しているんです。本当は、仲良く和気藹々とやるよりプロフェッショナルに徹する方が遥かに難しいんですよ。たとえば、ショートゴロでダブルプレーをとる場面。ショートはセカンドが1塁に投げやすいところに投げるのが技術なんです。普段お酒を飲んだりして仲が良いからといって、そこへ投げる技術が無かったらアウトにできない。普段どんなに仲が悪くても、投げやすいところに投げたら良い。そういう勝つために必要な技術を各自が身につけていけば、自然とチームワークも備わってくるんです。

会社や組織でも同じです。個々人がやるべき技術を磨き、それぞれプロフェッショナルになることが大事です。仲良くなるために一緒に酒を飲んだり、遊びに行っても意味が無い。

“チームワーク”でもう1つ悪いのは、上級生が下級生にくだらないことでいじめたり、制裁を加えたりすることです。今話題になっている相撲界の事件も同様です。“チームワーク”を害するから“チームワーク”を良くするという理屈で下級生や後輩をいじめたりするんです。これは、スポーツの“チームワーク”のマイナス面で、それをみんな気が付かないでやっています。会社でも同じようなことをやっているんです。本当は帰宅して奥さんとどこかへ行きたいのに、会社の“チームワーク”で「お前、今日はつきあえ」ということになる。プロ野球の選手なんかでも、あいつはチームメイトと一緒に酒を飲まないからチームで浮いているといった新聞記事や評論家のコメントを目にしたりしますが、信じられないことです。酒を飲まなくてもやることをやっていれば良いわけです。イチローがチームメイトと一緒に酒を飲まないからといって、チームの役に立たないなんて誰も言わないですよ。

■ “技術と感性で勝負する”ということ

加古：今度は研究の話をお聞きしたいのですが、先生はコンクリートの施工不良の問題を解決すべく、画期的な「自己充填コンクリート」を開発されました。しかし、このような新しく素晴らしい技術を開発したにもかかわらず、土木の分野では容易に普及しませんでした。非常に歯がゆかったり、悔しかったり、腹立たしかったのではないかと思うのですがいかがでしょうか。

岡村：「自己充填コンクリート」が容易に普及しなかつ

た理由は大きく2つあると思います。1つ目は一般的に日本ではヨーロッパやアメリカに比べて“生コン業者”の力が施工者（ゼネコン）に比べて弱いということ。例えば、「自己充填コンクリート」のような良い材料を使って多少材料費は高くなるが、結果トータルコストを小さくできるようなケースは多々あります。そういった場合施工者（ゼネコン）は、自分の利益が小さくなるということで良い材料を採用しません。ヨーロッパでは発注者や“生コン業者”に力がありますから、このような問題は生じません。要は、日本では本当の意味での価格競争をしておらず、儲かる人のところにイニシアチブがあるシステムなんです。そのことに気がつかなかったですね。

2つ目は日本の公共事業では、新しい技術や物を使いたがらない社会システムが根付いてしまっているということです。高度成長期に「誰もができる技術じゃないと使わない」、「一部のしかできない技術は排除する」という当時としてはやむを得ない事情から始まり現在に至っています。つまり、高度成長期は技術者不足を回避して、同じ物を早くたくさん造る必要があったんです。排除しなくても並列でやればよかったんですが。

役所が技術のことを全く知らないというのも問題の一つです。知らなければ使えませんからね。そこで土木の世界と医学との違いを感じました。医学は最先端の技術を持っていれば人が助かるんです。そうでなければ人が死ぬというところがあります。ですから、医師は常に最先端の技術を追いかけて一生懸命ついでいこうと努力するわけです。

加古：それは改善の方向に向かっているんですか。

岡村：少しづつですが、改善の方向に向かいつつあるんじゃないでしょうか。一部ですが、そういう土壤ができつつあります。本当の意味で、技術で勝負するという流れがここ1~2年で出てきましたね。

加古：高知工科大学では、工学系の分野はもちろん、芸術や文学、社会科学に関しても世界的に一流の講師陣を揃えられています。工学系の大学では非常に珍しいことだと思うのですが、どのようなお考えからでしょうか。これからの土木技術者が備えるべき素養とあわせて、考えを聞かせてください。

岡村：工学系だからこそ必要なんです。教養というのは、何かという問題です。教養とは何だと思えますか？

加古：知識ですか？

岡村：いや、そうじゃないんです。豊かな教養を身につけるためには、単なる知識ではなく、一流に接する、本物の香りを嗅ぐことが重要なんです。絵画にしても一流のものをたくさん観る、音楽でも一流の演奏家がやるのを聴けばその良さが感じられて、教養になるんです。社会科学とはどんなものかというのを手っ取り早く理解するには、社会科学の分野の最高の人にしゃべってもらうのが一番簡単じゃないですか。芸術、文化、社会科学について、わが国最高の文化を身につけた講師の方々にきていただいて、これらの方々を通じて、人生を豊かに生きるすべを学んで欲しいと考えています。だから、皆さんおっしゃるんですが、ここの学生たちはものすごく幸福ですよ。東大の学生よりはるかに感性が良いです。感覚で捉えると一流のものがすぐ分かるんです。東大の学生は論理的ですが、論理だと一流の方の講義と、そうでない方の講義の違いが分からないんです。感性ならすぐ分かるんです。これからは感性の時代、感性がより尊ばれる時代がきます。

実は感性と勘というのは近いわけです。私のピッチングはよく頭脳的ピッチングと言われるんですが、これは間違いです。つまり、頭なんか何も使わないで、自分の感性に従って投げているんです。頭を使っていたら間に合わない。だから、捕手から球が返ってきたら、投げたい球をすぐ投げる。これは感覚の世界です。

それから、サービス業というのは感性の世界ですね。だから、建設コンサルタントの仕事も、お客さんとやり取りする時は、論理も必要ですが、やはり重要なのは感覚でしょう。つまり、相手がどういう人なのか感じとらないと、サービス業は成り立たないですよ。そういう意味でも感性が良くないとどうしようもないでしょう。

新治伸治（大洋ホエールズ）というピッチャーが東大にいたんですが、彼は極めて真面目な性格で、論理でピッチングをやるんです。つまり相手打者を研究して、打者の構えによって配球を決めていたんです。しかも彼はコントロールが良いから、その通りで投げられるんです。結果、読みの良い打者からすれば、来る球が予測できてあれほど打ちやすい投手はいないということになるんです。感覚で来た相手に、論理で立ち向かうと論理が負けるんです。

それに、人間は生まれつき皆天才だと思うんです。ところがだんだん感性を殺して生きてきて、20歳過ぎればただの人になる。特に受験勉強というのは最悪で、感性を殺すものなんです。だから日本の官僚というのは感性がないとか、人間的でないと言われるすよね。

■「誠意」という宗教

加古：先生は大学院修士課程時代に東京六大学の審判もされています。選手時代を振り返って、「審判はそれぞれ個性を持っていたにしても、誠意を持って正確な判定をしてくれたと感謝している」と述べられていますが、この「誠意ある審判の判定」により、選手と審判の信頼関係が築かれていたと思うのですがいかがでしょうか。また、最近のプロ野球、高校野球を観ていると、この「誠意ある審判の判定による、選手と審判の信頼関係」が崩れ去り、不愉快な場面を多々目にするように思うのですがいかがでしょうか。

岡村：審判に誠意がないのが原因だと思います。審判に誠意があったら、もし間違った判定をしても、選手は絶対文句を言いません。私が六大学の審判をしていた時に、「審判もストライキ」といった内容の記事が掲載されたことがありました。私がセカンドの塁審をしている時にセンター横への外野フライがあがり、私は捕球の有無を確認する為にそれを追いかけた。センターが捕球できなかったことを確認して2塁の方を振り返ったらバッターランナーが2塁を狙って滑り込んできており、野手からの返球が一瞬早く、タイミングはアウトに見えた。本来なら1塁の塁審がセカンドのジャッジをするんですが、1塁の塁審は1塁にいますわ。私はいままだったんです。私はタイムをとって、審判団に集まってもらって、「私は遠くて見えなかったけど、タイミングアウトでどうですか」と相談し、アウトを宣言した。そうしたら、慶応大学の前田監督は一言も抗議しませんでした。それから守りについて慶応大学の北野2塁手が近づいてきて「あれは1塁の審判がジャッジするのですよね」と言ってくれた。私の誠意を持った判定に、慶応大学は監督も選手も誠意を持って応えてくれたということです。

加古：先生は常日頃から「誠意」の必要性を述べられていますが、現在の土木業界がおかれた立場、将来の土木業界のことを考えると先生が言われているこの「誠意」という言葉を土木技術者一人一人がまず胸に刻む必要があると思います。これからの土木業界が進むべき方向とあわせて、先生の考えをお聞かせください。

岡村：そういう大袈裟なものではなくて、自分の生き方としての考え方なんです。私は、「誠意」をもって自分がやっていたら、他人にどう思われようと良いという風に考えるようになったんです。もともとは神経質で、人のことが非常に気になる人間だったんです。それだと生きていくのが大変で、それから脱却する方

法、生きていく上での智慧として、自分が「誠意」を持って行動すれば、大部分の然るべき人間は分かるものだと思うことにしました。そうするとすごく楽になった。だから、私にとって「誠意」というのは一種の宗教です。

土木業界の行動や各々の会社としての行動も「誠実」に「誠意」を持って対応していけば、そんなに悪い世界にはならないんじゃないでしょうか。

時代が変化しているときに、古い体質を新しい体質に変えていっているわけですが、日本では製造業がまず変わりましたよね。国鉄もNTTも変わりました。それから、金融が変わろうとしていますね。最後に残っているのが農業と建設業で、農業が最も古い体質を保持しています。新しい体質を目指して、まずスーパーゼネコンは完全に舵を切ったわけですね。建設コンサルタントはどうなんですか？

加古：建設コンサルタントも同様で大手は舵を切りました。

岡村：堺屋太一さんが日本経済新聞にジンギス・ハンの小説を連載していました。出版されたら読んでみるといいです。非常に良い本で、いろいろなものの見方が変わるとおもいますよ。

加古：本日は、ご多忙を極める岡村学長に、無理を言ってお時間を頂戴しました。先生、本日は貴重なお話をいただき、本当にありがとうございました。そして、大変勉強になりました。

(2007年10月2日(火) 高知工科大学学長室にて収録)



インタビューを終えた後、岡村先生は学内を案内していただきました。大変充実した学舎と素晴らしい教育環境を見終えた時はすでに夕暮れ。そこを無理して、持参したグラブを手にキャッチボールをお願いした。本館横の庭は既に球筋も見えない程の暗さの中、ピシッ、ピシッと乾いた音だけが響いて心地良かった。岡村先生、本当にありがとうございました。

(加古)